

## ゲーテの“植物研究史”について

国 分 義 司

ゲーテの植物研究に関する著書「著者は自らの植物研究の由来を伝える」(Der Verfasser teilt die Geschichte seiner botanischen Studien mit)<sup>(1)</sup>——以下(V)と略す——は、1831年「植物変態論」(Die Metamorphose der Pflanzen)<sup>(2)</sup>のソレー(Spret)訳、フランス語版出版の際に付録としてつけられたものである。

これより先、1817年に「植物変態論」の二度目の出版の際、「形態学雑誌」(Zur Morphologie)第1巻第一分冊に、その序章として「私の植物研究の歴史」(Geschichte meines botanischen Studiums)——以下(G)と略す——という表題の一文と、「植物変態論の成立」(Entstehen des Aufsatzes über Metamorphose der Pflanzen)——以下(E)と略す——という表題の一文が上梓された。<sup>(3)</sup>(V)は、(G)と(E)をもとに書き換えられたものである。

上の成立事情を考慮すると、本文(V)は、次の二つの部分に分けられる。A——ほぼ(G)の文をもとにして、それに加筆した部分、B——ルソーの植物研究について、後に書き足された部分、C——(E)を底本とし、新たに「植物変態論」の成立過程を書き改めた部分。

本著書(V)の執筆の意図について、ゲーテは同著書の末尾で、詩人である自分が、ほんのゆきずりに重大発見をしたという偏見を防ぎ、愛着と情熱と首尾一貫した努力によって、この成果に達したことを、読者に理解してもらうためにこの文は書かれたと述べている。これは先に書かれた(G)

や (E) の目的とほぼ同一であるが、この目的をここで第一の目的としておく。この目的については、(G) や (E) の方が具体的で、それぞれゲーテの植物研究および変態論の成立の諸事情が明白に述べられていることを先ず指摘しておきたい。(V) は、文中に種々のエピソードを挿入して、むしろ目的の明確化を曖昧にしている。そのことについてゲーテ自身、同じく本著書の末尾近くで次のように述べている。

„; So möchte doch vielleicht der Fall eintreten, daß irgendein sonst wohlwollender Leser hiebei tadeln könnte: als habe ich mich zu viel und zu lange bei Kleinigkeiten und einzelnen Persönlichkeiten aufgehalten; deshalb wünsche ich denn hier zu erklären, daß dieses absichtlich und nicht ohne Vorbedacht geschehen sei, damit mir nach so vielem Besondern einiges Allgemeine beizubringen erlaubt sein möge.“<sup>(5)</sup>

つまりゲーテは意識してこのようにしたとしており、それによって何らかの普遍的なものを提出できればと願っているとも述べている。つまりこの著書をもって読者に望んでいることが他にある訳である。この、いはば抽象的で曖昧な意図をここで仮に第二の意図としておく。そして本論では (V) を (G) および (E) と比較しつつ、先ず第一の意図であるゲーテの植物研究史を明確にし、次に彼の第二の意図を本著書の中心思潮と文学性との関連において考察することにする。

## 1

上に述べたように (V) の A 部分には (G) からそのまま取り入れられたものと、それに後から書き加えた部分が混在していて、互に相補っている。ここではそのうちゲーテが目指した最初の意図である彼の植物研究史

について、その実年を整理しておきたい。<sup>(4)</sup> その際、ゲーテの記述通り、彼が植物学研究上かかわり合った人物を中心にまとめてゆく。

1) スケール (Johann Ludwig Gottlieb Skehl) 山林専門家、狩猟仲間。山林の検査、測量、伐採区分および植林の必要を学ぶ。

スケールとの交際は、1775年11月のゲーテのヴァイマル到着の直後からであるが、その当時は、ゲーテがカール、アウグスト公とチューリンゲンの森やワルデックなどで遊びまわっていた時期で、他人の目からはゲーテが公を唆して羽目をはずしていたと見られ、貴族達の聲望を買っていたようだが、本人は、森林に対する関心が芽生えた時期としている。

2) フォン、ヴェーデル (Otto Joachim Moritz von Wedel) ヴァイマルの森林局長。原生林の種類、根、樹液等の観察、蘚苔類、薬草特にリンドウ属への関心。

ゲーテは、1779年9月12日から、1780年1月13日までの第二次スイス旅行をしているが、それにはアウグスト公の外、このヴェーデルも加えている。これはゲーテの植物への関心を示す証拠とされている。

3) ブーフホルツ (Wilhelm Heinrich Sebastian Buchholz) 医師とその弟子ゲットリング (Johann Friedrich August Götting). ブーフホルツは分析化学者、後イェナ大学教授。医学利用の薬用植物の研究から純粋植物学への道を開く。

ブーフホルツとの交際の時期は、ゲーテの関心が植物学によりはむしろ自然科学一般、特に骨学(解剖学)、岩石学などに向けられていた時期に一致する。モンゴルフィエ氏気球をあげたことが本文中に出ているが、それは、1783年11月と1784年6月なので、このころ植物学を自然科学として把えようとし初めたのだろう。事実翌45年には、ゲーテが集中的に植物学に没頭していることが確認されている。クネーベルとの共同研究、共同の採集旅行がなされたのもこの年である。

- 4) イエナ大学植物学の教授達との交際およびリンネ (*Karl von Linné*) の「植物哲学」、チューリッヒ大学教授ゲスナー (*Johann Geßner*) の学位論文、医・植物学者ルッペ (*Heinrich Bernhard Ruppe*) の「イエナ植物誌」などの書物による植物学の研究。

はじめてゲーテがリンネの「植物哲学」を集中的に研究したのは1785年11月初旬なので、ゲスナーやルッペの著書の研究と同時期とみられる。

- 5) デートリッヒ (*Friedrich Gottlieb Dietrich*) 民間の植物通の農夫、ゲーテの植物採集の協力者。

- 6) バッチュ (*August Carl Batsch*) イエナ大学医、植物学教授、後イエナ大公領植物園長。植物分類の自然的方法について意見交換。

- 7) ビュットナー (*Christian Wilhelm Büttner*) 宮中顧問官。リンネの大系に対する批判的意見を大量の書物や図式によって教授さる。

1786年の春には、ゲーテはさらに徹底した植物研究に従事し、6月には「植物変態論」の草案が出来ている。第二次のカールスパート滞在では、旅行参加者達の間では話題がゲーテの「変態論」に集中したことが確認されている。このことからバッチュやビュットナーとの対話ではすでに「変態論」について話し合われ、カールスパートに同行したデートリッヒの協力は、この理論を証明する標本の採集に重点が置かれた。

以上が (V) の A の部分、つまり先に書かれた (G) に載っている部分で、ゲーテがヴァイマルにくる1775年から1786年夏の第二次カールスパート滞在までの約11年間のゲーテの植物研究史の概要である。

1786年9月3日にゲーテがカールスパートを私かに抜け出てイタリアに向ってから「変態論」を完成させるまでの経過は、(V) の C 部分に、植物研究史というよりはむしろ「変態論」成立史という形で書かれている。いわゆる先の (E) に相当する部分である。次にその要点をまとめながら同時にその時期を「イタリア紀行」を参照しつつ明確にし、ゲーテの植物

研究史を完成させたい。

- 1) すでにイタリア旅行前、ゲーテはリンネの植物学に批判的である。  
すなわちリンネのやり方は、植物の器官の「可変性」(Versalität)のなかに重大な困難があることを見いだす。
- 2) しかしながら植物は、環境によって変化するにも拘らず、その形態およびその性質に対するすでに獲得した権利を全く廃棄してしまうようなことがないということがわかり、新たな展望を持つ。
- 3) 1786年9月26, 27日、パドヴァの植物園で、熱帯植物を観察しているうちに、植物は強情にその種属的な性質を保持するが、その形態は元来固定されたものでなく、適切な可動性 (Mobilität) と柔軟性 (Biegsamkeit) が与えられており、多様な条件のもとでそれに適応したり、自らの形態を形成 (bilden) または変成 (umbilden) することが出来るのではないかという考えに到達する。
- 4) 1787年3月25日、ナポリにて原植物 (Urpflanzen) および子葉の変態による植物形成の理念の完成の思想、つまり植物が種々の外的条件に影響されて属、種への無限に変化する可能性があり、しかも植物自体の領域を保持し、どんなにかけ離れていても同一概念のもとに集積することが可能になれば、すべての植物を包摂する「原植物」というものが理念上考えられるという思想、および植物の全ての器官は、例えば「葉」というひとつの器官の変態ではないだろうかという思想が、ますます確信に達してくる。
- 5) 1787年4月17日パレルモの植物園にて上の理念を実証に導く「すべての植物部分の根源的同一性」(Die ursprüngliche Identität aller Pflanzenteile) が最終的に確認され、その後いたるところでその追確認に努める。
- 6) 1787年6月～1788年4月までの第二次ローマ滞在中、種々の植物に

ついて、種子からの栽培、芽からの栽培、枝のさし木および取り木などを通じて、観察、スケッチ、養育実験による植物変態の実証的研究を継続する。またその間、モーリッツとの討論を重ねながら変態論的植物学の文字による体系化を開始する。

7) 1789年3月、ヴァイマルに帰国後、「植物の変態を説明しようとする試み」(Versuch die Metamorphose der Pflanzen zu erklären) という題で全成果を執筆。

8) 1790年、同上書出版。

以上が約15年にわたるゲーテの植物研究の歴史であり、「変態論」の成立史でもある。そしてこれらの歴史を書くことになった第一の意図については、(V)のA部分に後年書き加えられた次の一文は、その要約となるだろう。

„Vorgesagtem nachdenkend, wird man die Vorteile nicht verkennen, die mir meine Lage zu dergleichen Studien gewährte: große Gärten, sowohl an der Stadt als an Lustschlössern, hie und da in der Gegend Baum-und Gebüsch-Anlagen nicht ohne botanische Rücksicht, dazu die Beihülfe einer in der Nachbarschaft längst durchgearbeiteten wissenschaftlichen Lokalfloora, nebst der Einwirkung einer stets fortschreitenden Akademie, alles zusammengenommen gab einem aufgeweckten Geiste genügsame Fördernis zur Einsicht in die Pflanzenwelt.“<sup>(6)</sup>

## 2

今第一の意図を整理してみたが、これらはその間に挿入された解説や、ゲーテの自然研究観やエピソードなどとたくみに交り合っている。次に第

二の意図を明らかにするとすれば当然これらの部分、すなわち、全体から第一の意図を差し引いた部分に光をあてれば良いことになる。すなわち、A C 部分からはそれぞれ、(G) (E) を引いた部分と B の部分がその中心となる筈である。それ故次にはこれらの部分を考察することにする。

(V) の A 部分では、第一の意図については、ゲーテの植物研究のための環境および外的条件が成果に有効に作用していたことを明らかにしていた。次には同じ A の部分から、それらの外的条件からゲーテの内にどのようなものが蓄積されていたかを本文に沿って整理してゆくことにする。

- 1) ゲーテは大都会で育ち、古典語と近代諸外国語を学び、それを修辞学や詩の練習に結びつけた。さらに彼の精神活動は社会的なものと同時に「美文学」(Schöne Literatur) に向うことになったが、外的自然に対する何らかの概念と結びつくものは非常に稀であった。
- 2) 青年時代には「ヴェルテル」「ファウスト」等の作品を発表し、人間の内面の描写で喝采を受けたが、これらの作品の中には絶えざる創造と破壊の中で明るみに出る自然の巨大な神秘を認識しようとするまじめな衝動のきざしもあった。
- 3) ヴァイマルでの活動的な生活の中で、ゲーテは初めて自然の領域に目を向けることになった。スケール、ヴェーデル等に植物利用の実体を、プーフホルツは医学利用の薬草の研究から自由な植物学への道をまたデートリッヒ一家のような民間の植物通の人々は、多様な生物界の実像をゲーテに示した。
- 4) リンネをはじめとした書物からもゲーテは植物学を学んだが、バッチュやピュットナー等はゲーテに、詩人にふさわしい植物学への新しい道を示した。すなわち植物を高昇的に展開する進歩のなかで分類すること、もっとも単純な、殆んど目に見えない初期的なものから、も

っとも複雑な、もっとも巨大なものへ進歩するものとしての植物分類を完成することを学ぶ。

以上はA部分に書かれたものの要約であるが、次の一文はこれらをさらに手短かに述べているように思える。

„Hiebei möchte man bemerken, daß der Gang meiner botanischen Bildung einigermaßen der Geschichte der Botanik selbst ähnelte; denn ich war vom augenfälligsten Allgemeinen auf das Nutzbare, Anwendbare, vom Bedarf zur Kenntnis gelangt...“ (7)

次にはB部分のいわゆるルソー・エピソードの個所を見ることになるが、ゲーテはこの部分の終りに、この部分の挿入の意義について、植物研究上のあの時期、ルソーから受けたものをある程度暗示するために書いたと述べている。さし当り内容の整理を試みる。

### 1) ルソーの植物研究の発端。

彼は嵐のような著作活動の後、人類と不和になり、植物という豊富な自然の領域に心を留めるようになる。そして真実を見抜く純粋な精神を働かせながら、自然の子たちに精通しようという孤独な旅に出る。

### 2) 1770年のトゥーレット夫人宛の手紙の引用に見られるルソーの研究態度。

彼は植物学の基礎的な教育を受けていないので、何かを知ろうとするよりも、気晴し、楽しみのために学ぶが、純粋な精神を持って事に当たったので、専門の学者が行ったものよりもっと歩調のしっかりしたものが出来あがった。

### 3) ルソーの研究方法。

個的なものを通じて頂点に到達し、そこから全体の展望を得る。つまり隠されている一つの根本法則を求めて、はかり知れない程多様な形式を知る。具体的には、植物の諸部分をひとつひとつ出してみせ、それら



の部分で区別し、それらの全体からもう一度その植物を作りあげ、つくりあげられた全体を科の分類にあてはめる。この方法で次第に多様性を増し、交錯した姿の中に現われるそれらの相違を直観させながら完全な展望へと導く。

#### 4) その成果。

1822年、「ルソー植物学」という題で彼の植物に関する全著作が出版される。

以上から明らかなように、A部分に書かれた、ゲーテの内的自然研究史と、B部分に挿入されたルソーのそれとでは、次の点で非常に類似している。

1. 両者共、植物学への関心は遅く、基礎教育は受けていない。しかしながら自然の創造の神秘には早くから触れていた。
2. 両者共、研究態度にためらいながらも真摯で、しかも伸び伸びとしている。
3. 方法としては、非常に一般的で有用なものから次第に高等な、複雑なものへ進み、終局的には生成する生物界全体を展望し得る根本法則を予感し得るようなものを探求しようとする。

これらの共通点から、ルソーに関する挿話を入れた理由として、ゲーテが述べているように、ゲーテがルソーから学んだことをまとめたことは当然出来るが、また自分と同じ精神の他人を出すことによって、自分を補強するために行っただけではないかと思えることも出来る。そのような意図がなかったとしてもそれなりの効果は十分に出ていることは否定出来ない。それ故この効果をルソーの項の挿入の第一点として取りあげておく。

次に注目される効果はAの部分の終りとC部分の初めにあるゲーテのリッネ批判前の叙述との関連である。ゲーテのリッネに対する批判は本来、非常に強かった筈である。それはリッネの方法批判が、そのままゲーテの

「変態論」および「形態学」に発展したこともあって、それを論じている個所が具体的で理解し易いばかりでなく、非常に表現力豊かに表されていることからわかる。次にその二例をあげてみたい。

„Ein Solcher (=Ich) sollte nun eine fertige Terminologie ins Gedächtnis aufnehmen, eine gewisse Anzahl Wörter und Beiwörter bereit haben, damit er, wenn ihm irgendeine Gestalt vorkäme, eine geschickte Auswahl treffend, sie zu charakteristischer Bezeichnung anzuwenden und zu ordnen wisse. Dergleichen Behandlung erschien mir immer als eine Art von Mosaik, wo man einen fertigen Stift neben den andern setzt, um aus tausend Einzelheiten endlich den Schein eines Bildes hervorzubringen; und so war mir die Forderung in diesem Sinne gewissermaßen widerlich.“<sup>(8)</sup>

„Unauflösbar schien mir die Aufgabe, Genera mit Sicherheit zu bezeichnen, ihnen die Spezies unterzuordnen. Wie es vorgeschrieben war, las ich wohl, allein wie sollt' ich eine Treffende Bestimmung hoffen, da man bei Linnés Lebzeiten schon manche Geschlechter in sich getrennt und zersplittert, ja sogar Klassen aufgehoben hatte; woraus hervorzugehen schien: der genialste, scharfsichtigste Mann selbst habe die Natur nur en gros bewältigen und beherrschen können.“<sup>(9)</sup>

それにもかかわらずゲーテは、これらの文の前か後に「私は同時代人と共にリンネを認め、彼の洞察、だれをも感動させる彼の活動を認めた」とか、「彼に対する私の畏敬の気持はいささかも減少しなかった」などと述べた文を配し、いわゆるリンネと強く対決することを極力避けた表現をしている。

また、もしもこのルソーに関する一文の挿入がなければ、理論的には反リンネ的なバッチュとピュットナーに関する途述となっているAの部分の後半が、直接、C部分のリンネに対するゲーテの疑念、あるいは批判の文に続いてしまって、結局リンネと対決が強く出てくることになる。

以上のことを考慮するとゲーテは、植物学に向う基本姿勢、研究態度が非常に似ており、しかもその成果が植物学の発展に大きく寄与することになったルソーは、同じく反リンネ的な結果をもたらしたけれども、リンネのとかく前進的な影響を高く評価している点を重視し、ルソーに関する一文の挿入によって、詩人による植物学の一成果が反リンネ、反学者のなかで得られたというような強い論調になることを避けたのではないかと見られるのである。

### 3

ここで再び初めに提出した問題に戻りたい。ゲーテの植物研究の発端、経過、方法、成果およびゲーテとその精神において非常に類似したルソーのそれらを読みとり、更にそれらの精神を読みとればリンネの学説に対する誹謗など、もはや問題ではなくなってしまうというような立場にまでゲーテはすでに到達していたということまで理解した時、それらはゲーテ自身の意図に近づいたことになるだろうかという問題である。もしこれだけで終るとゲーテのこの小篇から少しばかり教訓めいた普遍的なものが得られたような気にはなるが、「非常に多くの特殊なことのあとで、いくつかの普遍的なことを提出することが許されるようにという目的」の、それは狭義の解釈を行ったに過ぎないとみなされることは必定である。

一般には、この小文の内容の面、つまり自己史の告白的表出、自己の過去における創作品の解説的要素の濃さ、事実と挿話と思想を混在させ、

からみ合わせつつ読者を把える創作法など、ともう一つの面、つまりこの書物の成立の時期がゲーテの死の前年であること、すなわち「イタリア紀行」(Italienische Reise) 完成〈1829年〉の二年後であり、「詩と真実」(Dichtung und Wahrheit) 完成〈1830年〉の翌年であることから、それはゲーテの一連の「告白文学」の植物学版として書かれたものであるという面から、この作品は一篇の詩的創作を意図されたものであると言われている。この一般的評価を否定することはないが、さらに進んでこの作品を次の二つの理由から、一種の教養小説の小篇、また原型として完結しようという意図があったのではないかと見たい。

一つは、改作に当ってルソーの植物研究史と自己のそれを並列させた手法についてである。これは「マイスター」を改作した折に、いわゆる「ウァマイスター」(Urmeister)を「修業時代」(Wilhelm Meisters Lehrjahre)の第5章までに圧縮したのち、それまでの主人公の生き方とその精神の上で極めて類似するヒロインを配した「美しい魂の告白」(Bekenntnisse einer schönen Seele)という題名の物語を第六章にいきなり挿入し、両者の生活史を並列させてみるという手法と同一である。

さらに、上に述べた「マイスター」の改作の際に「美しい魂」という女性を登場させた時期は、ゲーテが「植物変態論」の完成に向っていた時期に一致し、彼女を生活者の典型として創造されたことは、一年生の植物の規則的(前進的)メタモルフォーゼとして把えられたゲーテの植物学上の根本思想と一致する。この時期を中心にした植物研究史を回顧するとき、この「マイスター」改作の手法と同時にその精神も思い出されたとしても決して不思議ではない。ゲーテの植物学に関する諸論文に、副題として、„Bildung und Umbildung der organischen Naturen”と書かれているが、むしろこのことは、この自己の植物研究史の披瀝の際に改めて強く意識され、かってこの理論から „Die Metamorphose der Menschen”

の一展型として創造された „Eine schöne Seele” を登場させた例を、ここでは、ルソーの生活史として再登場させ、自らを自らの「植物学史の発展」という小説の主人公に仕立てて書き改めたのではないかと推論される。ゲーテは、少なくとも植物研究においては、彼自身が説く規則的メタモルフォーゼに従って展開し、この分野においても「生活の典型」を形成したことを、死期の近づいたこの時期に確認しつつ、この作品で改作したと見ることが出来る。このように見た場合、第一の意図の強調は弱められ、従つて、第一の意図の中では中心をなす筈のリンネ批判は、解消されても良いことになる。

〔注〕

- (1) 本題名は Text として用いた „Goethes Werke Bd. XIII. Christian Wegner Verlag, Hamburg, vierte Auflage: 1962 による。
- (2) 1790年の初版では „Versuch die Metamorphose der Pflanzen zu erklären.” という題であった。
- (3) 両書共ワイマル版ゲーテ全集 „Goethes Werke II Abteilung 6 Band. Weimar, Hermann Bährlau 1891“ の Lesarten 中の S. 389~396 を参照した。
- (4) 実年を整理する際に、いちいち日記、手紙等の出典を挙げることをせず Text の注、上掲書 S. 148 および、Goethes Werke Bd. XIV の年表その他の研究成果を参照するにとどめた。
- (5) Goethes Werke. Hamburger Ausgabe XIII, S.167
- (6) Ibid. S. 156 f.
- (7) Ibid. S. 151
- (8) Ibid. S. 160
- (9) Ibid. S. 161

(7月11日受理)

Über Goethes „Der Verfasser teilt die Geschichte  
seiner botanischen Studien mit“

KOKUBUN Yoshiji

Goethes „Der Verfasser teilt die Geschichte seiner botanischen Studien mit“ wurde im Jahre 1932 [ein Jahr vor seinem Tod] veröffentlicht. Goethe arbeitete zu diesem Werke die beiden kleinen Stücke „Geschichte meines botanischen Studiums“ und „Entstehen des Aufsatzes über Metamorphose der Pflanzen“ um. Diese Stücke wurden im Jahre 1790, als Goethe den Erstdruck von seinem botanischen Aufsatz „Versuch die Metamorphose der Pflanzen zu erklären“ erhalten hatte, geschrieben.

In neu umgearbeiteten Werk wurde, wie Goethe selbst darüber sagte, außer der Geschichte seiner botanischen Studien noch eine andere allgemeine Absicht mitgeteilt. Das Allgemeine wäre was ein poetisches Werk den Lesern zeigen soll. Goethe wollte mit diesem Stück einen botanischen autobiographischen Bildungsroman schreiben.